

## 圖 版 要 項

## 一 大雅筆十便畫冊汲便圖

神奈川 川端康成氏藏

紙本淡彩 縦一七・九種(五寸九分)  
横一七・九種(五寸九分)

大雅筆十便圖、蕪村筆十宜圖の畫冊については、本誌第四九號に脇本氏の十便十宜畫冊小攷の一文があり、既にその委曲を悉されてゐる。新に國寶に指定されたのに際し、汲便の一圖を載せて一應の解説を付することゝしたい。

わが南畫壇の双壁である大雅と蕪村の聯作であるこの十便十宜畫冊は、云ふまでもなく記念すべき存在である。十宜畫冊宜風圖に「明和辛卯八月寫」謝春星」との款記あることによつて、この聯作が明和八年一七七一の制作と知られ、當時蕪村五十五歳、大雅四十九歳である。大雅が洞庭赤壁圖卷に款して「右萬曆己酉楊聖魯記」明和辛卯秋八月補圖併書「無名」とするのを想起すれば、この明和八年八月は大雅にとつて、世に知られる名品二作を残すこととなつた。のみならず、この二作が共に、その畫因が中國の文學に胚胎してゐることを看過し得ない。おそらく十便十宜畫冊の制作も、蕪村が受動的であり、大雅がより積極的であつたと解しうることによりしても、南畫家のいはゆる書卷の氣を享けて如何にこれを具現するに急であつたかが知られよう。芥子園畫傳の叙によつて、わが南畫家に知られ、親まれた李笠翁がその隱棲を詠じた伊園十便十宜の詩がこの畫冊の主題となり、その笠翁の生活が大雅、蕪村にとつても身近かに感觸されるものであつただけに、その制作は打込んで成されたと推測するに難くない。殊に大雅の場合、その主題が十便即ち耕便、課農便、釣便、灌園便、

汲便、澆濯便、樵便、防夜便、吟便、眺便であり、生活の叙述であるだけに蕪村の十宜即ち宜春、宜夏、宜秋、宜寒、宜曉、宜晴、宜風、宜陰、宜雨が環境の描寫であるのに比して、自らより内的な感銘を生むところである。圖について蕪村が宜夏、宜曉、宜晩の三圖に人物を配すに止め、いづれも機巧に富んでゐるが山水描寫に終止するのに反し、大雅が耕便、澆濯便、課農便、防夜の四圖に人物を缺くのみで、他は大きく伊園主人と思はれる人物を描き、釣便には客人童子を添へるところに變化ある構想を展開して心情に豊かな動きを示してゐる。このことはおなじ大雅の作品、前述の洞庭赤壁圖卷に比しても、云ひうることであらう。

手法も蕪村が宜冬、宜晩、宜晴三圖は殆んど色彩を用ひず墨畫仕立て、色彩を用ひれば藍、綠、赭などの効果が鮮やかに感覺的であるのに對し、大雅は一層に慎重であり、入念の施工である。十圖とも殆んど餘地を残さず、畫面全體に手を入れてゐることは、吟便圖の主人公の襟、卓上に置かれた書冊の小口或は防夜便圖の雲間が白く抜かれて目立つことに徴して明らかであらう。この汲便圖にあつては水を受ける白い甕の効果もまたそれに近い。墨調の濃淡とおなじく、藍、綠、黃、赭の使用も濃淡の變化をきわめ、淡彩とは云へ、豊富な色感を表し、また雰圍氣の表現に成功して奥深い畫面を構成する。ことに汲便圖の土坡に見られる如き、墨、藍、綠、特に赭の點を或は鮮かに或は淡く、或は疎に或は密に打つてその偕調によつて物のあり方を捕捉することは、大雅独自の手法とすべきであり、かくして描出された環境のうちに、あるかなきかの線で軽く渴筆で刷かれた桶の水に對する人物の袴に鮮やかな黄色を點じて、この一圖は間然するところなく引締められてゐる。方六寸に足りないこれらの小畫面に對して大雅の配心はまた容易ならざるものがある。

安永五年一七七六五十四歳で歿した大雅の生涯として、この四十九歳の制作である十便圖がその完成期の作品を意味することは自明である。かつては野山

遍照光院、黄檗などの障壁の大畫面に奔放な構想と縦横無盡の手腕を振つた大雅が、この小畫面に沈潜し、南畫家としての全生活の意欲を凝集したところにこの作品を見るとの感を深くする。南畫壇の先驅者であつた祇園南海、彭城百川、柳澤淇園相次いで世を去つた後を承けて、この年次に於いて大雅、蕪村が最年長の二人であり、ともども時代を荷負つて立つ最高峰の位置にあつたことも言ふまでもなく、この制作に對してわが南畫の様式の根柢まで掘下けられた眞實さを見出すであらう。

十便の各圖に、その詩を題し白文の「池無名印」を捺し、また圖に朱文「遵生」及びおなじく「前身相馬方九皐」の遊印を見るが、最初の耕便圖に序を伴ひ、最後の眺便圖にのみ「霞樵無名寫意」とする款記がある。圖の制作態度とひとしく、この大雅の筆蹟も細心の執筆である。ただ現在第二に位置するこの汲便圖が原詩によれば第五で、前掲の如き畫冊の順序に錯簡あることは既に脇本氏によつて指摘されたところである。十宜圖各圖に「謝春星」と款記する蕪村の場合、現在第八の前述明和辛卯の年記ある宜風圖が最後に來ることによつて、十便十宜畫冊としての體裁が首尾一貫し、制作當時原詩の順序によるものと推定されたことも當然である。

なほ大雅、蕪村聯作の十便十宜畫冊の他本岩崎家藏のものあるを國華三四四號に紹介され、またその岩崎家本の海保青陵跋に三本あることを言及してゐるが、これらについても脇本氏が道破するところで、この川端氏本を以て信憑すべき唯一の原本たるべき見解は動かすべくもない。

この傳來について付記すれば十宜畫冊の冠頭「聯璧」との題字に伴ふ増山雪齋の款記に「丁未夏六月三日爲學海平兄書」長州勝亥」とあつて、丁未は天明七年一七八七平學海は名古屋の人下郷次郎八、宇君栗の有であつたこと、また十便十宜各畫冊の笥書に「宜春亭藏」とあり、千原信、號華溪の藏であることが脇本氏によつて考證されたが、笥の蓋裏書にいつれも長三洲の「庚辰冬日觀

於澗橋之通儷堂」三洲長英」及び平野五岳の「辛巳秋日觀于花溪月波樓」古竹老岳」とあり、庚辰は明治十三年一八八〇辛巳は翌十四年一八八一で、三洲、五岳ともに千原氏と同郷豐後の人である關係より、後者に見ゆる「花溪」を千原氏と解し得て明治十四年には千原氏藏であつたと知られる。以後千原氏を出て、大島甚三氏、双軒庵として世に知られた松本松藏氏、榭谷晉三氏を経て現在に至つてゐる。(熊谷)

## 二 長沼守敬作 老夫

ブロンズ 高 五五・四釐(一尺八寸三分)

東京藝術大學藏

## 三 荻原守衛作 工夫

石膏 高 四七・九釐(一尺五寸八分)

長野 荻原碌山館藏

以上參照 中村傳三郎「明治末期に於けるロダン」

## 四 日光菩薩像

木像 高 七八釐(二尺五寸七分)

國立博物館藏

## 吉祥天像

木像 高 一七二・七釐(五尺七寸)

奈良 西大寺藏

## 釋迦如來像

木像 高 七〇・六釐(二尺三寸三分)

奈良 西大寺藏

## 藥師如來像

木像 高 一〇七・六釐(三尺五寸五分)

奈良 興福寺藏